

震災を振り返って

東小千谷中二年 鈴木 亘

その時ぼくは友達の家から帰ってきて、本
を読んでいた。あの時は家族全員があんな大
きな地震がくるなんて想像もしていなかった。
地震なんて一生こないと思っていた。そして
午後五時五十六分、今までに体験したこと
ない強いゆれが起こった。ぼくはどうしてい
いかあからなかった。すると兄が、
「テールの下にかくれろ。」

と聞いた。ぼくはその通りにすぐにかくれた。
テールの下からのぞくと、本棚からたぐさ
んの本がおちていた。その直後に、家の裏で
土砂崩れが起き、土砂がかべをヤぶって家の
中に入ってきた。その場にはいた兄や祖父は土
砂の来ない風呂場へいったが、ぼくだけ逃げ
おくれた。回っていかうと思ったが、家具な
どの物と土砂にはさまり身動きがとれなか
た。その時、二階にいた父が助けにきてくれ
た。父が助けに来てくれなかったらぼくは助

からなかつた。たと思ふ。外を見たら車が土砂に
おし流されていくのが見えた。ほくも風呂場
の方へ逃げたが、危険なので外へ出た。外は
とても寒かつた。しばらくは車の中で寒さを
しのいだ。父や祖父がとなりの家を人を助け
てきた。親が服を持ってきたので着かえた。
そして、車庫が安全だつたのでこたつなどを
持ってきて一晩を明かした。電気は発電機を
をつかつた。次の日、起きると父が十二平S
OSと道路に大きくスプレーで書いていた。
地域の道がすべてこわれ、ぼく達は地域の外
に出ることができなかつた。救助に来るへり
コンピュータにかかると書いてたのだ。家へい
てみると、家の前の道路はくずれてなくな
っていた。家の中は前の日とはまるで違つて
いた。一階の床は土砂でうまり、壁は崩れ、
家具はほとんど流されていた。その時はとり
あえず必要なものだけをとって外に出た。外
は晴れていて、空にはへりが飛んでいた。数
時間後に自衛隊の人が助けに来てくれた。そ

して小千谷の総合体育館の避難所へ向かった。
避難所は人であふれていた。寝るスペースも
ないほどだった。そんな中で友達にあつた。
友達にはげましてくれたし、話していろと元
気が出た。友達の大切さを改めて思った。
もう地震から一年以上も経った。ぼくがこ
の地震で感じたことは、感謝の気持ちだ。自
衛隊の方々や多くのボランティアの方々、地域
の方々、はげましてくれた友達。この人達に
対する感謝の気持ちは一生涯忘れるはいけな
い。そしてこの体験を多くの人達に伝え
ていきたい。